

# L. T. ミード作『少女たちの世界』にみられる 『ジェイン・エア』の影響

加塩 里美

## The Influence of *Jane Eyre* upon *A World of Girls* by L. T. Meade

Satomi KASHIO

### Abstract

This paper deals with the influence of *Jane Eyre* upon L. T. Meade's popular novel, *A World of Girls*. In the school in the story, *Jane Eyre* is banned, that is to say, the book has become a sort of a meta-text. By comparing these two novels, the reason why Meade took up *Jane Eyre* especially in her work comes to light. In Chapter 1, the effect of Christianity upon the formation of the heroine's personality is taken into consideration. Chapter 2 treats the meaning behind the banning of *Jane Eyre* being read in the school. Through the argument, the possibility that the ban has hidden implication becomes clear, which is, Meade's suggestion to the young girls that they should read *Jane Eyre*. Jane's strong individuality, passion and morality give the readers the courage to live through the time of "The Odd Women". Chapter 3 deals with the role of un-English characters of the gypsies in the novels. The ambiguity of their portrayal gives a complicated flavour to the stories. In conclusion, being "a daughter of Jane Eyre" is the ideal which Meade intended to show to her readers.

キーワード : 1. 『少女たちの世界』 2. 『ジェイン・エア』 3. キリスト教の影響  
4. 禁書 5. ジプシー

Key Words : 1. *A World of Girls* 2. *Jane Eyre* 3. The effect of Christianity  
4. a banned book 5. gypsy

### 日本語要旨

L. T. ミードの小説『少女たちの世界』の寄宿学校において、シャーロット・ブロンテの著作『ジェイン・エア』は、学校内で決して読むてはいけない本、すなわち禁書扱いを受けている。換言すれば、この小説をミードは、メタテキストとして『少女たちの世界』の読者に紹介しているのである。本稿では、作者ミードが自著の中で『ジェイン・エア』を取り上げた理由を考察し、ミードが描く女性の理想像を明確にする。

第1章では、聖職者の娘として育ったブロンテとミードを比較し、キリスト教が両作品の主人公に与えた影響を検証する。

第2章では、禁書扱いを受けてはいるものの、実はミードには、その裏に『ジェイン・エア』を読むようにと読者に促す意図があった、という観点に立ち、論を展開する。ブロンテが感じていた社会に対する怒りは、自活する道を探す必要に迫られたミードの時代の女性の、現状打破の突破口

となる可能性を秘めている。ミードは、時代を切り開いて生きていく女性の模範としてこの本を推薦する気持ちを持っていたという可能性について述べる。

第3章では、『少女たちの世界』におけるミードの創作方針を明らかにする。ジブシーに似た少女を主人公とすることで、外見より内面の美しさを備えた女性、いうなれば、新しい女性の魅力を描き出そうとしたのである。このことは、『ジェイン・エア』の作者が描こうとしたヒロインの姿にも共通する。

内面の美しさと勇気で人生を切り開いていく女性を描いた『少女たちの世界』は、当時の少女たちに受け入れられ、人気を博した。この新しいタイプの主人公は、変化しつつある社会状況をたくましく勇敢に乗り切っていく「ジェイン・エアの娘」ともいうべき、当時の女性の「あらまほしき姿」であることを本稿の結論とする。

## 第1章 2つの作品の関連

### 第1節 ミードとブロンテ

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) が亡くなる前年の1854年に誕生したアイルランド人のL. T. ミード (本名 Elizabeth Thomasina Meade Smith, 1854-1914) と、イギリスの北部ヨークシャー出身のブロンテの共通点としては、2人とも、聖職者を父親に持つということ、当時人気の高かった小説家であったということ、さらには2人とも、次の世代を担う若い女性の教育に意欲を持っていたことなどがあげられる。

ミードは、ヴィクトリア後期において人気のあった女性作家で、17歳の時から創作を始め、生涯で300作以上の少女小説を残した。1886年に出版された『少女たちの世界』の登場人物の中心は、ラベンダー・ハウスという寄宿学校で学ぶ10代の少女たちである。それは、彼女らが共同生活を営む寄宿学校で起こる少女同士のぶつかり合いや葛藤、嫉妬を乗り越えて真の勇気や友情が育まれるストーリーである。この作品は、ミードの代表作の1つとなり、1920年代まで人気を博した。それゆえ、『少女たちの世界』は、彼女が作家として成功した初の少女向け学校物語として位置づけられる。

彼女は、1854年に牧師 R.T.ミードの娘として、アイルランドのコーク州で生まれた。その後、ロンドンに移り住み、1879年にアルフレッド・トゥールミン・スミスと結婚した。1886年に代表作である『少女たちの世界』を世に出した後、1887年に若い女性向けの文芸雑誌「アタランタ」の編集者となり、6年間携わった。彼女は、「アタランタ」の編集者として、ガヴァネス以外の職業で自立を考えている読者のために、職業案内のコーナーを作り、実際に資格を取って社会で活躍している女性からのアドバイスを載せている。また彼女は、著名な作家を取り上げて、良書に親しみ、その作家に関するエッセイを書かせるなど、多くの企画をこの雑誌の中に盛り込んでいる。これらのことからミードが編集者として、読者である若い世代の少女たちに教養を身につけさせ、「女余り現象」が深刻であった時代を力強く生きていく存在になることを望んだことが理解される。

その後、「アタランタ」の編集者を辞したのちもミードは、精力的に作家活動を続けた。川

端氏は、彼女の作品について、「ミードのヒロインたちは優れた知性と伝統的な女性的な資質が、難なく両立することを示して見せた」<sup>1</sup>と述べ、自立して自分の人生を生きる女性を描く20世紀の小説の先駆けとなったことを明らかにした。

他方、シャーロット・ブロンテは、1816年にヨークシャーで生まれた。父パトリックは、ヨークシャー州ハワースで、41年間イングランド国教会の副司祭を務めた。成長したシャーロットは、若い女性に音楽やフランス語などの教育を施す学校を設立しようと考えた。そこで彼女は、ベルギーに留学してフランス語を学ぶなど努力したが、計画は断念せざるを得なくなった。その後彼女は、妹たちと話し合っ、家計を助けるために小説の執筆を始めた。その第2作目、1847年に出版された『ジェイン・エア』が、センセーションを巻き起こし、シャーロットは一躍人気作家の座を獲得した。

## 第2節 作品内に描かれる牧師

この2つの作品には、キリスト教が色濃く反映されていることがその特徴の1つとして挙げられる。『少女たちの世界』のラベンダー・ハウス、『ジェイン・エア』のローウッド学院という寄宿学校には、それぞれエバラード (Mr. Everard) とプロクルハーストという牧師が登場する。

ラベンダー・ハウスは、ウィリス夫人によって経営される、裕福な階級の子女を対象とした寄宿学校で、作中では「一流の学校」(Ch. 2, p. 7; “a first-class school”)<sup>2</sup>と紹介されている。彼女の教育に対する考え方を反映して、生活環境、教育共に理想的な学校である。牧師のエバラードは高潔な牧師であり、問題を起こした生徒に対して、ウィリス夫人の母親のような、愛情のこもったいさめの言葉が効をなさないときに登場する。人生の先輩として、父親のようなおおらかさ、神に仕える者の厳しさをもって少女たちを導く。師は、次のように少女たちに語りかけ、「神の赦し」を説く。

The old clergyman assured the girls that God was waiting to forgive those who truly repented, and that the way to repent was to rise up and sin no more. (Ch. 38, p. 263)

この言葉の中には、人間は過ちを犯す存在であることを認め、それを正す勇氣、素直さがあれば、必ず神はその人間を見捨てはしない、という牧師自身の優しさが認められる。

他方、ローウッド学院で学ぶ貧しい家庭の少女たちは、みな慈善活動からの恩恵により教育を受けている。プロクルハーストは、キリスト教の中のカルヴィニズムを信奉している。彼の“...she shall be placed in that nursery of chosen plants - and I trusted she will shew herself grateful for the inestimable privilege of her election.”<sup>3</sup> (Ch. 4, p. 35) という言葉の中には、元来、選ばれた

1 川端有子「アタランタ 別冊解説」, アティーナ・プレス, 2009年, 3ページ。

2 引用はすべて以下のテキストに従い、本文引用末尾に章とページ数を記載する。L. T. Meade, *A World of Girls*, The Project Gutenberg E-Book www.gutenberg.org Release Date: June 22, 2008, Ch. 2, p. 7. なお、日本語での記載は、すべて加塩訳。

3 引用はすべて以下のテキストに従い、本文引用末尾に章とページ数を記載する。*Jane Eyre*, New York: Oxford University Press, 2000.

者しか神の恩恵に浴することができないという選民主義が表れている。しかし、プロクルハーストには、カルヴィニズムの教義によって、生徒たちを良い方向に導くすばらしい教育者でありたいという気持ちは無い。そのことは、新しい環境で精いっぱい努力し、皆に認められる生徒になろうという、意欲に満ちたジェインの希望の芽を摘み取ろうとすることに現れている。彼は、学院では「肉体の飢えにパンを与えることで、かえって魂を飢えさせることになる」、*「この世の肉体の欲望を抑え、つつましくすべし」*などと唱え、学院生には耐えがたいほどの窮乏を強いている。その反面彼は、家族には「……ベルベットや絹や毛皮で立派に」(Ch. 7, p.64) 着飾らせて、学院を訪問させる。このように彼は、自分の言葉に矛盾を生じていることを何とも思わず、都合のいいように宗教を取り込むエゴイストである。

ジェインは幼い頃、聖書の中の黙示録やダニエル書などを読んでいた。しかし、入学後、本格的にキリスト教と出会い、素晴らしい恩師や友人から影響を受け、学院を去るまでの間に自分と神との関係を確立する。プロクルハーストは、エパラードと対照的な牧師ではあるが、学院での教育を通して、主人公に敬虔な心を涵養したという点において、大きな影響を与えた。

### 第3節 キリスト教の影響

作品の中で、主人公が自然の中で神に祈り、心の平安を得る場面は、後の行動と生き方を決定させる神の啓示がもたらされる重要なシーンである。それぞれの作品の中から当該場面を取り出してみよう。

『少女たちの世界』の中では、ジブシーの老婆が、主人公のアニー (Annie Forest) と友人たちが校則を破ったことを知り、口止め料としてお金をゆすり取ろうとする。しかしアニーは、毅然とした態度をとり、自分は何も恐れてはいない、お金を渡しなどしない、と老婆に言い放つ (pp.245-46)。この強い態度に敵意を抱いた老婆は、アニーがかわいがっていた幼い少女をラベンダー・ハウスから誘拐しようと決心し、実行に移す。

自分のせいで少女が連れ去られたことを知ったアニーは、一人で少女を連れ戻す決心をする。校則を破り、無断で寄宿学校を抜け出し、ひそかにジブシーのキャラバンの後を追う。その途中で、牧草地で寒さに震えて一夜を過ごしながら、それまでの自分の罪を悔い、ひたすら神に祈る。1晩中祈りをささげた彼女の心のなかには、次のように、神は自分の味方になってくださるという自信がわいてくる。

The verse which had occurred to her two mornings before still rang in her ears:

“A soul which has sinned and is pardoned again.”

The impulsive, eager child was possessed just now of something which men call True Courage; it was founded on the knowledge that God would help her, and was accordingly calm and strengthening. (Ch. 44, pp. 295-96)

この祈りの後、「神よ、どうかあの子を見つけさせ給え」と熱心に唱え、ジブシーのキャンブ地へと急ぐのである。この場面には、自分の恐れを知らない向う見ずな性格に対する悔悟と、邪悪なジブシーの住む居留地に乗りでいって不安と、それに打ち勝つための神への全幅の信

頼が表現されている。

『ジェイン・エア』の主人公ジェインは、ロチェスターと知り合う以前は、真摯に神と向き合い、純真な気持ちで祈ることで、神と良好な関係を築いていた。しかし、ロチェスターと出会い、強い愛情を感じるようになる。彼の存在を、「あたかも、人間と光が満ち満ちた太陽との間をさえぎる日食のよう」(Ch. 19, p. 274)と表現し、続いて「彼が原因となり、私は神を見ることができなくなっていた」(Ch. 19, p. 274)と、かつての神と自分との関係を崩してしまっていることが述べられている。妻の存在が発覚し、自分の愛情は結婚と結びつけることができないのだと知ったジェインは、断腸の思いで屋敷を抜け出し、姿を消す。絶望的な思いのまま荒野をさまよい歩き、雨に打たれる。その過酷な状況の中で、ひたすら神に祈る。それは自らのために捧げた祈りでもあり、重婚を企て、結果的に姦淫の罪を犯しそうになったロチェスターのための祈りでもあった。

自分と神との関係の間に、日食のように立ちはだかっていたロチェスターの存在が、長い祈りを経た後で変化する。ジェインの中に、「神は彼をお救い下さる、彼は大丈夫だ」という確信が生まれるのである。彼女の心の中で、絶対的な神を上位に置くことで、ロチェスターは下位の、神にひれ伏す人間としての立場に戻ったことが読み取れる。ここからは、以前のような信仰心がよみがえり、彼女と神との関係が修復されたことが理解される。

この2つの作品の主人公には、共通点がある。それは、快適な居場所を抜け出し、自分の信念に従って行動する勇気と、良識を持っている点である。また、自然の厳しさに触れ、人智の及ばない大自然の力に神の存在を見出す聡明さを備えている点でもある。聖職者の娘として育った2人の作家は、常に神を身近に感じていたはずである。敬虔な人々の捧げる祈りを目にする機会も多かったであろう。どちらの作品も、そのようなひたむきな気持ちで祈りをささげる信者の姿を描き出している。

『少女たちの世界』の登場人物の環境や思考パターン、そして行動を分析してみると、『ジェイン・エア』の登場人物から影響を受けたのではないかとと思われる部分が多くみられる。そこで本章では、まず『少女たちの世界』の中から主だった2人の登場人物を取り上げ、その行動の描写や思考から人物像を検証してみたい。その後、ラベンダー・ハウスの校風や校長の教育方針を踏まえ、『ジェイン・エア』が禁書として取り上げられた理由を探る。

## 第2章 作品内の人々

### 第1節 主人公、アニー・フォレストとジェイン・エア

2人の主人公、『少女たちの世界』のアニーと『ジェイン・エア』のジェインは、どちらも幼いころから、つらい境遇で育ってきたということが共通している。

アニーは幼いころ、自分だけの子守りとして2人が雇われており、馬車を所有しているきわめて裕福な家庭で育ってきた。父親(Captain Forest)は、彼女が幼いころ、船が難破し行方不明となってしまう。残された母と子は、次第に生活状況が悪化し、ついには極貧生活を余儀なくされるのである。母親は生活を支えるために懸命に働くが、健康を害して亡くなってしまふ。孤児となったアニーを、母の古くからの友人であったウィリス夫人が引き取ることにな

る。母親が瀕死の状況でアニーに話しかけ、ウィリス夫人の恩に報いるようにと言いつけさせる<sup>4</sup>。そのためアニーは、孤児となった自分を引き取り、育て、教育まで受けさせてくれる校長のウィリス夫人を誰よりも敬愛している。

サリー・ミッチェルは自書の中で、ミードはアニーのような少女を描くことに長けていたことを次のように述べている。

Meade is really very good at adolescents - a word just then coming into use...She created characters who are wilful, selfish, forgetful, snobbish, priggish, stubborn, rude, changeable<sup>5</sup>

アニーも、この指摘の中にある“priggish”とか“changeable”という表現に当てはまる少女であった。ミードは、『少女たちの世界』の中でアニーに自分の行動に関して反省する機会を幾度も与えているが、その反省が長続きしないことを、「彼女の改心の約束は、まさに、ことわざで述べられたパイの皮のようなものであった」(Ch. 10, p. 62)と述べ、彼女のやや軽はずみな行動に走る性格の一端を描きだしている。彼女の行動が原因となり、いろいろな出来事が学園内で起こる。

ラベンダー・ハウスでは、食べかけの菓子が机の中に入れていたり、別の少女のお気に入りへの詩集に、風刺画を貼り付けてあったりという事件が起こる。詩集にいたずらをされた少女セシルは、生徒たちの中で、アニーの生い立ちを唯一知り、優しく気遣ってくれる心の温かい少女であった。また、別の日には、一人の少女が机の中に隠し持っていた禁書『ジェイン・エア』が、人目のつく教室の床の上に置かれていたという出来事も起こる。狡猾で、悪意を持つ人物がこの学校に潜んでいることが、読み取れる。

このほかにも様々な事件が起こるが、そのすべてが、アニーが犯人ではないにも関わらず、作者ミードの巧みなプロットにより、どうしてもアニーが真犯人であるとしか考えられない状況に追い込まれる。そのため、敬愛していたウィリス夫人までもが、アニーが真犯人であるという判断を下してしまう。学校で孤立し、ウィリス夫人という心よりどころまで失ってしまったアニーは、完全に一人ぼっちになる。

そのような状況で、ジブシーによる幼女の誘拐事件が起こる。幸いにもアニーの懸命の努力により、幼女は無事に救い出される。それと時を同じくして、学校では、真犯人を知っているヘスターが、罪の意識に耐えられず、牧師に告白をする。彼女は、真犯人を知っていながら、自分はアニーに反感を抱いていたため、彼女に疑いがかけられても、見て見ぬふりをしていたのである。一緒に校長に告白をしに行こうと真犯人を説得する。しかし、校長はアニーのことで、学校に不在で対応することができない。偶然エバラード師が来合わせ、彼の登場によってすべての真相が明らかになる。

それを知らないアニーは、幼女を救い出した後、高熱が続き、次のようにうわごとを言う。

...I never pasted that caricature into Cecil's book. I know you don't believe me, Cecil; but do you

4 Ch. 35, p. 242.

5 Sally Mitchell, *The New Girl; Girl's Culture in England, 1880-1915*, New York: Columbia University Press, 1995, p. 22.

think I would really do anything so mean about one whom love? No, No! I am innocent! God knows it. Yes, I am glad of that - God knows it. (Ch. 30, p. 327)

熱に浮かされたアニーは、枕元にいるウィリス夫人の前で何度もこの言葉を繰り返す。「神様は知っている」というところでは、落ち着いた声で、笑みさえ浮かべている様子を見た校長は、「神よ、彼女を見誤った私をお助けください」とつぶやく。

『ジェイン・エア』の主人公ジェインも、同様の環境に置かれている。牧師をしていた父は、精力的に慈善活動が続けていたが、そこで病気にかかり、父も母も時を置かずして亡くなってしまふ。孤児となったジェインは、母方の親戚に預けられるが、そこで叔母一家からひどい待遇を受ける。その後、慈善学校であるローウッド学院に入り、テンブル先生や、ヘレン・バーンズという心を許せる友人と出会う。ヘレンは、結核にかかっている、間もなく亡くなってしまふ。成長したジェインがローウッド学院で一緒に教職に携わっていたテンブル先生は、結婚を機に学院を去る。

学園での生活環境には、大きな差異があるものの、2人の主人公に共通するのは、愛情への渴望である。父母との別れや、つらい境遇で育ってきたこと、信頼できる人々との出会いと、誤解や別れなど、自分が扱って立つ地盤が消え去るほどの孤独感に苛まれる。その中でも、常に自分を認めてほしい、愛してほしいという感情に揺り動かされて行動する。

神の御心に沿う人間になりたいということと、神様だけでなく、自分が愛する人から信頼され愛されたいというこれら2つの望みは、ジェインが、友人のヘレン・バーンズに語った望みである。「神の愛」と「この世での愛」というテーマを念頭に置くと、この2つの作品はどちらも、主人公がその両方を求める旅を描いているという読み方ができる。

## 第2節 スーザン・ドラモンドとバーサ・メイスン

スーザン・ドラモンド (Susan Drummond) は、ラベンダー・ハウスの中では、あまり人目を引く生徒ではない。勉強は好きではなく、常に眠気を感じていて、だらしなく、食欲が旺盛な少女である。集団の中で目立たない少女であるが、この学校で起こる様々な事件の真犯人が、実はこのスーザンなのである。悪だくみを仕掛け、何の証拠も残さず、同級生にいやな思いをさせる。自分が悪意を抱く級友を不快な気持ちにし、憂さ晴らしをするという鬱屈した性格の持ち主である。彼女が、ひそかに計略を実行に移すのは、必ず皆が寝静まった真夜中である。

サリー・ミッチェルが自書の中で、ミードは青年期の人間の姿を描き出すことに長けている、と指摘したことは、前述のとおりである。さらに彼女は、ラベンダー・ハウスのような良家の子女の通う学校にも、スーザンのような人物がいることを、次のように述べている。

...who (Meade's characters) act out their anger and distress - basically decent girls who do some really dreadful things.<sup>6</sup>

このことからわかるとおり、『少女たちの世界』のスーザンを通じて、不自由のない暮らし

6 Mitchell, p. 22.

ができる階級に所属している少女が、怒りや悩みから行動にかられ、恐ろしいことをしでかす心の奥にある闇を、ミードは明るみに出した。

ある晩ヘスターは、フランスの詩集の1冊を教室に忘れてきたことに気が付いた。自分が今手掛けている「マリー・アントワネット」の小論文を書く際の資料として、どうしても詩集を手元に置きたいと思った彼女は、校則を破って寝室を抜け出し、教室に取りに行く。静まり返った教室で詩集を手にした彼女は、上級生の座る机のあたりに人影を発見し、それがスーザンであることを確認する。ヘスターは、彼女に見つからないように身を隠し、教室からいなくなるまで息を殺して潜む。翌日、上級生の書いた「川」の小論文が「泥の流れ」というばかげたパロディにすり替わっているのが発見される。このことからヘスターは、一連の嫌がらせはスーザンの仕業であることを知る。自分の恨みを晴らそうと、真夜中に悪だくみを画策しているスーザンの姿は、ヘスターの目を通して、次のように表現されている。

The next moment somebody came heavily and rather clumsily down the room... (Ch. 29, p. 211)

ここで用いられている“heavily”や“rather clumsily”という表現は、人間ではなく鈍重な動物が暗がりでは動いている印象を与える。ヘスターは、校則を破ったのだという負い目に加え、一瞬間ではないものに会ったような恐怖感を感じたに違いない。何の証拠も残さない鮮やかな手口に比べて、スーザンの、人間であるのに、動物を連想させる動きのぎこちなさは印象的である。

同様の描写が、『ジェイン・エア』の中にも見られる。ロチェスターの妻バーサは、真夜中に看護師が眠った隙に、こっそりと隠し部屋をぬけだす。夫ロチェスターの寝台に火をつけて焼き殺そうとしたり、ジェインの婚礼用のベールを引き裂いたりして、ジェインを恐怖に陥れる。その後、ロチェスターとの結婚の夢を断たれたジェインが初めて目にするバーサの姿は、4つ足で歩き回る獰猛な猛獣のようであった<sup>7</sup>。

真夜中に害意を持って行動するこの2人の女性は、周りの人の心を理解できないという点でも共通している。真犯人であることが露見し、エバラード師に白状した時のスーザンの言葉がそのことを表している。

「私は、そのいたずらの咎めがアニーに降りかかるなんて思ってもいませんでした。それがわかったとき、1度か2度は打ち明ける気にもなったんだけど、面倒くさかったし、ウィリス先生から処罰されそうでいやだなんて思ったんです。」(中略) スーザンは打ち明け話を、普段通りの変化のない、一本調子の声で話した。彼女の表情には、ほんのわずかな感情の動きも見られず、口調にも、後悔の念は含まれていなかった。(中略)「ずいぶんと苦心したんですよ。」と、しばらく間をおいてから、スーザンは少し不満げに続けた。「ただの冗談だったのに、何でこんな大騒ぎになったのか分からないわ。私の周りで起こるごたごたをうまく処理するために、睡眠時間まで削ったっていうのに。これ以上苦労して、友達にいたずらを仕掛ける気にもならないわ。あの子たちには、そんな価値がないも

7 *Jane Eyre*, Ch. 26, p. 293.



の。」(Ch. 49, pp. 323-24)

この言葉からわかるとおりスーザンは、他の生徒たちに与えた心痛を押し量る想像力を持たず、責任ある行動とはどういうものかも判断できない。彼女には、人間として大切な愛情や優しさが欠けているのである。罪の意識と悔悟の念といったものは、スーザンには無縁である。牧師はこの告白を聞いたのち、聖書の1節を引用し、次のように強くいさめる。

Miss Drummond, I pray God you may at least repent and be sorry. There are some people mentioned in the Bible who are spoken of as past feeling. Wretched girl, while there is yet time, pray that you may not belong to them. (Ch. 49, p. 325)

ここで牧師が用いた“past feeling”という言葉は、新約聖書の「エフェソ人への手紙」の第4章19節に用いられている。当該部分には「(彼らは)鈍感になって放蕩に身を委ね、貪欲を持って不浄の極みを尽くした行動へと走った人々(である)」<sup>8</sup>と記されており、欲深さから、汚い仕事に手を染めることに慣れて、無感覚になった人たちを指すのに用いられている。自分が嫌がらせをした相手の困惑だけではなく、真犯人ではないかと嫌疑をかけられた生徒の苦しみを少しも感じることができないこの少女は、このまま誰とも会わず放校処分となる。

この「放蕩」「貪欲」「不浄の極みを尽くした行動」という表現は、まさに、妻パーサについて述べる時にロチェスターが用いた言葉、「(パーサは)大酒のみで貞淑でない」(Ch. 27, p. 306)や、「彼女の不摂生が精神疾患の要因の発育を速めた」(Ch. 27, p. 306)という表現と呼応する。人間の感情のない狂気にむしばまれたパーサの姿は、まさに“past feeling”と表現されている人の姿である。心の苦しみを理解できず、淡々と語るスーザンの心は、人間を認識することができない、攻撃的なパーサの心と類似している。

### 第3節 ラベンダー・ハウスと、校長ウィリス夫人

ウィリス夫人が校長を務める寄宿学校ラベンダー・ハウスとは、どのような校風の学校であったのか。彼女は、確固とした信念と教育方針を持つ校長であり、その教育方針は次の様に述べられている。

...it (Lavender House) is for those little girls who make up their minds to be brave and good. (Ch. 3, p. 17)

女子校の理想に「勇敢」という言葉を用いているのは、今日ではやや奇異に映る。しかし、この“brave”という言葉は、ヴィクトリア時代の若い女性にとっては、特別な響きを持って受け止められていたに違いない。なぜならば、当時のイギリスでは、「女余り現象」が深刻な社会問題となっていたからである。未婚女性は、「女余り現象」から母親世代までの理想像の、

8 『パウロの名による書簡 共同書簡 ヨハネの黙示録』(新約聖書), 保坂高殿・小林稔・小河陽(訳), 岩波書店, 1997年, 28ページ。

結婚して「家庭の天使」たる妻や母親になることがきわめて困難になってしまった。つまり未婚女性は、手に職をつけたり、資格を取ったりして、経済的に自立し、自分一人で生きていけるすべを身につけなくてはいけなくなったのである。社会進出を視野に入れ、自立を余儀なくされる若い女性たちに贈る「勇敢な」という言葉の中には、彼女らを応援する力が込められている。

ミードが編集者として携わった「アタランタ」の中でも、同じ“brave”という言葉が印象的な使われ方をしている。それは、自立を目指す女性たちに「着色石版刷りの絵師」(Chromo-Lithographer)の職業を紹介するグレースの言葉である。彼女は、“not like a man, but a brave woman” (*Atalanta*, May, 1888, p. 474) と述べ、この時代の女性に必要なのは、見事な刺繍やピアノや歌い方で男性を魅了する方法ではなく、石版刷りの絵師やその他の専門職に必要な技能であると考えた。そして、自立に向けて前進する女性たちを力づける言葉がこの「勇敢な」という言葉なのである。

『少女たちの世界』のウィリス夫人が考える理想の少女像と、「アタランタ」の記者が理想とする女性像は、困難な時代を生き抜く“brave”という性質を備えた新しい未来のレディを作り出すのだという、作家としての、また編集者としてのミードの理念に一致している。それは、保守的なレディを作り出す旧来の教育とは一線を画している。

このウィリス夫人の考え方を反映しているのが、校則である。それは、生徒の自主性を重んじたものであり、夫人の女学校時代の校則とは比べ物にならないほど締め付けが緩い。

She was determined to give her girls a great deal more liberty than was accorded in most of the boarding-schools of her day. She never made what she called impossible rules. (Ch. 9, p. 55)

この彼女の判断からは、生徒たちの良識を尊重し、自由な校風の中で教育するのが最善である、という考えが読み取れる。自分の良識に従い、強い意志を持ち、自活して生きていく、これは『ジェイン・エア』の主人公が追い求めた生き方に他ならない。学校の理想とする女性像と、ジェインの生き方には多くの共通点が認められることが看取される。

このように自由な校風であるにもかかわらず、『ジェイン・エア』だけは、絶対に読むことを許可されていない。しかも、禁書として取り上げられているのは、この1冊のみである。もし、ラベンダー・ハウスが、生徒たちを厳しい戒律や規則で縛りつける学校であるならば、『ジェイン・エア』のみならず、多くの小説や書物が読むのを禁じられていても不思議ではない。また、『ジェイン・エア』のヒロイン、ジェインの考え方や行動が、校長のウィリス夫人の教育方針や、この学校が世に送り出そうとしている女性の理想像に合わないのであれば、禁書という扱いも明確に理由づけられるであろう。

それにしても、なぜこの小説が禁書として取り上げられることになったのであろうか。次の第4節では、これまでの議論をもとに、『ジェイン・エア』が禁書として取り上げられている理由を考えてみたい。

#### 第4節 禁書としての『ジェイン・エア』

学校で禁じられている書物『ジェイン・エア』が教室で見つかり、先生の1人であるミセス・グッドがその本を掲げた時の、教室内の全生徒の緊張が伝わってくるのが次の箇所である。

There was a hush of astonishment when she [Mrs. Good] held up the little book [*Jane Eyre*], for all the girls knew well that this special volume was not allowed for school literature. (Ch. 11, p. 74)

静まり返った教室の雰囲気から、この寄宿学校で『ジェイン・エア』を読むことは重大な校則違反にあたること、全校生徒がそれを承知していることが看取される。さらに、別のページでは、“...this special book is not allowed to be read at any time in Lavender House.” (Ch. 11, p. 76)とも述べられている。“at any time”という言葉からは、厳しい禁止事項であることが理解されるが、その理由については、本文中に全く述べられていない。

さらに、この本の所有者は、ドーラ・ラッセル (Dora Russell) という高慢な態度の少女で、多くの女生徒の反感をかっていた。女生徒たちは、ドーラにどんな処罰が下るのかと、好奇に満ちた目で注目していたが、彼女の日常は全く普段どおりであった。実際に処罰が下ったのかも、本文では明らかにされていない。一例として、ミードが地の文で表現している本文中の描写を引いてみよう。

She refused to discuss the affair with her companions, and none of them quite knew what Mrs. Willis said to her, or what special punishment was inflicted on the proud girl. Several of her schoolfellows expected that Dora's drawing-room<sup>9</sup> would be taken away from her, but she still retained it; and after a few days the affair of the book was almost forgotten. (Ch. 11, pp. 76-77)

この学校では、校則に違反した者には、それ相応の罰が下される。たとえば、許可なく部屋に入った生徒には、フランス語の詩を30行書かせる (Ch. 3, p. 15) という罰が下る。その他にも、休み時間に自室で謹慎しなければいけないとか、校長のウィリス夫人と面会することができない、という罰の記述がある。中でも、最も厳しい処罰は、重大事が明るみに出され、その後、その生徒は誰にも会わず、退学処分になっているというものである。

生徒の自主性を尊重する規則の緩やかな学校にあって、禁書という厳しい扱いを受けている本を読んだ者に対する処罰が、何も書かれていないのはなぜであろうか。さまざまなことを考え合わせると、作者ミードは、禁書を読んだ少女の処分を、意図的に描写しなかったのではないかと推測される。

ここで、『ジェイン・エア』は当時、どのような評価を受けていたのか、本当にこの作品が禁書に値する書物としてみなされていたのかを確認してみよう。1847年に出版された『ジェイ

9 ラベンダー・ハウスでは、良い行い (親切な行為や自己犠牲) をした生徒、わずか20人のみが、大きな部屋の中に、パーティションで区切られた小さな自分だけの “drawing-room” を持つことができる。その中は、完全に自由で、私物を持ち込み、好きなように飾ったり、友人を招いて、小さなお茶会を開いたりすることもできる。校長の判断だけで、この部屋を与えたり、没収したりすることができるのである。没収されることも少なくともなく、没収された少女のみがその理由を理解している。

ン・エア』は、主人公が情熱の爆発と抑制や、反抗と服従などを繰り返しながら、次第に人間として成長していく様を描いている。発売当初から、センセーションを巻き起こし、批評家たちは次々に、その新鮮さや力強さ、現実感をほめたたえた。「シャーロット自身はプロテスタントの強い信者であったが、ローマ・カトリックの機関紙である「タブレット」までもが、道徳心を涵養するために、この小説を推奨した<sup>10</sup>」のである。サッカレーもこの本を読み「すぐにその真価を認め、出版社への特徴的な手紙の中で、その作品の比類なき価値を認め<sup>11</sup>」ている。また、彼には著者シャーロットの前で一部を暗唱して、彼女を驚かせたという逸話<sup>12</sup>もある。さらには、ヴィクトリア女王も、この本を読んで感動した<sup>13</sup>という記録が残されている。

ミードが編集に携わった1889年3月号の「アタランタ」の、アタランタ・スカラシップ・リーディング・ユニオン（“Atalanta Scholarship & Reading Union”）<sup>14</sup>では、シャーロット・ブロンテを取り上げているが、その中で執筆担当者のメアリー・ロビンソンは、『ジェイン・エア』のことを明らかに後世まで残る名作である、と断言している。このように、『ジェイン・エア』は、1847年出版当時だけでなく、「アタランタ」の時代の1887年以降にも高く評価されていたことがわかる。

ミードは、『ジェイン・エア』を『少女たちの世界』の中で、禁書扱いとされるテキストとして描く反面、その理由や処罰の詳細について述べていない。これには、重大な意味があるように思われる。『ジェイン・エア』の内容が、寄宿学校の若い生徒たちにふさわしくないという単純な理由ならば、おそらくミードは、この『少女たちの世界』の中で『ジェイン・エア』の扱い方を変えていたのではないだろうか。すなわち、この本が禁書とされる理由を明記し、それを読んでいた生徒をどのように処罰したのかという描写にページを割いたはずである。あるいは、まったくこの本について触れないという選択もできたはずである。

それゆえ、ミードが自分の小説の中で『ジェイン・エア』を、あえて禁書として描いたことには、別の意図があったとは考えられないだろうか。つまり、禁書というネガティブな書き方をしているが、実際は、少女たちにこの本を勧めるというポジティブな意図があったという可能性である。読者は、禁書という扱いによって『ジェイン・エア』に興味をかき立てられる。しかも、その理由が意図的に隠されているのならば、読後に残るその疑問を解決しようとその書物を手にするはずである。ミードは、このようにして、国民に愛された当時の女王をも感動させた『ジェイン・エア』を読むように、読者たちを促したかったのではないだろうか。そうだとすれば、ドーラの一件も納得できるのである。

『ジェイン・エア』の著者シャーロット・ブロンテは、男女間の不公平や階級社会により抑圧された者の不満を通して、当時の社会に対する自らの怒りを表明していた。ブロンテが感じていたこの怒りは、自活する道を探す必要に迫られた「アタランタ」の時代の女性の、現状打

10 *Jane Eyre* (New York: Oxford University Press, 2000), 'Introduction', vii.

11 エリザベス・ギャスケル、山脇百合子（訳）『シャーロット・ブロンテの生涯』ギャスケル全集7 大阪教育図書、2005年。272-73ページ。

12 青山誠子『ブロンテ姉妹 人と思想128』清水書院、1994年、134ページ参照。

13 青山誠子、121ページ。

14 これは、「アタランタ」の中で毎号1人の有名な作家を取り上げて、その執筆担当者が、作家の生涯や作品解説などを寄稿する。その作家についてのショート・エッセイを読者に書かせ、文学的教養を高めさせようという企画である。

破の突破口となる可能性を秘めている。小説『ジェイン・エア』は、次第に人間として成長していく女主人公の人生を描いたヴィクトリア時代の教養小説である。ジェインの誇り高く、自立して歩いていこうとする態度は、時代を超えて、若い女性達の理想であり、ミードは時代を切り開いて生きていく女性の模範としてこの本を推薦する気持ちを持っていたのだと言えよう。

### 第3章 作品におけるジプシー像

#### 第1節 作品内のジプシー

両作品の中には、どちらもジプシーが登場する。『少女たちの世界』に登場する数人のジプシーの中で、最も印象的な人物は、レイチェルという名の老婆である。アニーと友人たちは、真夜中に寄宿学校を抜け出し、近くの野原に出かける。内緒で調達しておいたバスケットいっぱいのタルトやメレンゲ菓子、サクランボやハム、チキン、飲み物などを持参し、ピクニックを楽しむ。明け方近く、人に知られないように学校に戻る途中、少女らはレイチェルに出くわす。老婆は、始めは哀れっぽい声をだし、一人ずつ未来を占ってあげようと言う。少女らは、お金を出すのをためらう。すると、老婆は、慰めな言葉ではあるが、少女たちをおびえさせるほどの皮肉を込めた物腰で、「そうしないと学校に今日のことを報告するよ。良くて退学だろうさ」(Ch. 23, p.203)と言い、少女たちがそれぞれ出した6ペンス銀貨をポケットに入れる。

アニーの手のひらを見た老婆は、「困難が待ち受けている。お前に何らかの容疑がかり、命を危険にさらすことになるだろうよ。でもそれを打ち負かすことができるね。お前は勝てるさ。勇気のある子だね、その勇気を行動で表すことができるだろう」(Ch. 23, p. 203)という予言を下す。この場面でミードは、アニーの身にこれから起きることをジプシー占いによって読者に提示する。アニーには、まさにその予言通りのことが起きるのである。級友へのいたずらは、すべてアニーに容疑がかけられる。その後、ジプシーに誘拐された少女を救出したアニーは、命を危険にさらすほどの高熱による意識不明に陥る。

この場面のジプシー老婆のキャラクターには、当時の人々がジプシーに対して抱いていたイメージを巧みに用いていることが看取される。それは、ジプシーは普通の人には無い能力を持っていそうだとか、ジプシー占いは当たりそうだというイメージである。老婆の予言が示されることによって読者は、アニーの身に何か良くないことが起こるのではないかと不安を抱く。

またレイチェルは、占ってあげようと言ってはいるが、実際は口止め料をゆすり取っているのである。それを明らかにするためにミードは、「レイチェルは、ゆすりで手に入れたお金(“blackmail”)をポケットに入れた」(Ch. 23, p. 203)という表現を用いている。表向きはまっとうな商売によって経済活動をしているように見えるが、その実は恐喝である。このいかがわしさが、この後も作品内に影を落とす。老婆は、ラベンダー・ハウスの近くにたびたび現れ、弱みを握られた少女たちは、レイチェルの姿におびえて暮らすことになる。アニーは、再び老婆に出会った時に、強い口調で「老婆を恐れていない」ことを伝え、「お金は払わない、先生に話したければそうすればいい」と断言する。アニーの強い態度に反感を覚えた老婆は、少女を誘拐する。つまり、「困難」「命の危険」という予言は、このアニーの発言が引き金となり、占ったジプシー本人の行動によって現実の世界に入ってくるのである。

『ジェイン・エア』においてもジブシーは、主人公ジェインの未来を占い、「強風が吹き、地震や火事が起こるかもしれない。しかし私（ジェイン）は、良心の指示に従うだろう」<sup>15</sup>と判断する。その後まもなく、彼女とロチェスターの結婚式は、彼の妻の存在によって中断され、ジェインは強風と地震から受けるような衝撃を覚え、足元の地盤が揺らぐ思いに駆られる。屋敷を逃げ出した1年後には、ソーンフィールド邸は、パーサの放った火によって焼失してしまう。このように、ジブシーの予想どおり様々な困難が、ジェイン自身や彼女の周りで起きる。しかし彼女は、最後には良心に従い困難を乗り越え、最愛のロチェスターと結ばれることになる。

この場合のジブシーは、実は、ロチェスターが変装したものであった。自分の屋敷に招いた客人たちのことを熟知し、行動をつぶさに観察してきたロチェスターにとって、占いと称して様々なことを言い当てるのは容易である。しかし、ジェインの人生にこれから強風や地震、火事に象徴される困難が待ち受けていることは、ロチェスターであってもこの時点では知る由もない。それでも、予言通りのことが起き、ジェインは運命の波に翻弄されていく。ロチェスター扮するジブシーは、見事なまでに恐ろしさを感じさせる。この場面のジブシーは、彼らが不思議な力を持っていることを印象づけるのに十分な文学的役割を担っている。

両作品に描き出されているジブシーの集団は、通常のイギリス社会とは必要最低限の接触しか持たない隔絶された閉鎖社会で生活している。彼らは、独自の文化を持ち、必ずしもイギリスの法律に従っているとは言えない<sup>16</sup>。

『少女たちの世界』に描かれているジブシーたちの世界は、外部の者にとっては、いったん迷い込むと出られない深い森のような印象を与える。レイチェルは、少女たちの弱みをにぎってお金をゆすり取ろうとし、それが失敗すると、幼女を強引にさらうなどの悪事をなす。しかも、一族の結束の強さと、特有の狡猾さで物事を有利に運ぼうとする。幼女をローマ時代に掘られた地下の貯蔵倉庫に隠し、その入口が判らないようにカモフラージュし、警察官でも幼女を助けられない状況に追い込むのである。アニーの努力によってようやく幼女は救出され、事件は解決する。この事件でのアニーの行動から、彼女の自己犠牲と真の勇気という美德が際立ってくる。

他方、ジブシーたちに対する当時のイギリス社会の人々の反応はどのようなものであっただろうか。本作品には、次のような場面がある。つまり、幼女を助けるために、アニーがジブシーの少女に扮装して町中に入り、パン屋でパンを買おうとした時のことである。アニーの行きつけの店であるそのパン屋の店員は、好感が持て、優しい接客をする人物であった。しかしアニーが、巧みに変装したジブシーの姿で入店すると、軽蔑を込めた形相でにらみ、お金を持っていても、パン1つさえ売ろうとはしない。店員は、決して友好的ではなく、彼女はジブシーの存在そのものが、店の品格を貶めると考えているかのようである。この店員の態度は、イギリス社会の人々のジブシーに対する態度を象徴しているように思われる。それは、こちらから接触する気はないし、向こうからも接触してほしくないと考えているような態度である。要するに、

15 *Jane Eyre*, Ch. 19, p. 201.

16 ジブシーたちの社会が、イギリス社会の常識が通用しない「異国」、つまり「内なる外」であることは、1887年の10月号の雑誌「アタランタ」に掲載されたミード書き下ろしの短編小説 *The Tambourine Girl* にも見て取れる。

ジプシーの存在は、イギリスの階級社会から外れたいやしいもの、いわば、社会にとっての厄介者であることがこの箇所から読み取れる。

しかし、ジプシーに対するイメージは、ただ単に社会の厄介者という否定的なとらえられ方ではなく、肯定的なとらえられ方をしていることも理解しておく必要がある。ミードは、この作品の中で主人公アニーを、ジプシーに似た外見として描き出している。彼女は、“the merry black eyes of this gypsy maiden” (Ch. 4, p. 21) を持っている、と表現されている。このことは、アニーの外見が、典型的なイギリス人少女の特徴と異なっていることを表し、彼女が典型的な少女とは異なる考え方や行動をとることを示唆している。ミードは、このような外見を持つアニーを通して、新しい女性を主人公に据えた小説を作り上げた。従来のイギリス女性の美しさの概念を打ち破り、新しい時代の女性の理想となる可能性を、「ジプシー」と言う言葉やイメージで表現しようとしているのである。そして、この小説が多くの若い読者の心をつかんだという事実は、とりわけ重要である。

アニーは幼いころから、次のようにジプシーに対して憧れを持っていた。

For her, personally, their wildness and their freedom had a certain fascination, and she was heard in her gayest moments to remark that she would rather like to be stolen and adopted by a gypsy tribe. (Ch. 40, p. 274)

ここに表れているのは、ジプシーの持つ自由にあこがれる少女の姿である。同様の姿が、イギリスの古い童謡の中にも歌われている<sup>17</sup>。ここからは、主人公の少女が、父親や母親に禁止されても、異人種のジプシーに心惹かれていることが読み取れる。ジプシーを、自分を現実の束縛から解放してくれる存在ととらえ、「目の見えない白馬」と共に、親の庇護下から旅立つ自分の姿を想像しているのである。

アニーのジプシーに対するイメージは、まさにこの歌の中の少女のジプシーに対するイメージと一致している。このことから、彼女のジプシーに対するイメージは、当時のイギリス人が抱くジプシーの基本的なイメージの枠内に納まっていて、そこから逸脱するものではないことが理解される。幼い頃、アニーの子守り役はジプシーの女性であり、ジプシーの特徴的な事柄をアニーにいろいろと語ってくれた。また彼女も、子守りの女性にジプシーの話をしてくれるように何度もせがんだ。その時の知識が役立ち、アニーは巧妙に隠された地下の貯蔵倉庫から幼女を救出することに成功するのである。

17 My mother said, I never should / Play with the gypsies in the wood.  
If I did, then she would say: / Naughty girl to disobey.  
Your hair shan't curl and your shoes shan't shine, / You gypsy girl you shan't be mine.  
And my father said that if I did, / He'd rap my head with the teapot lid.  
My mother said, I never should / Play with the gypsies in the wood.  
The wood was dark, and the grass was green; / By came Sally with a tambourine.  
I went to sea - no ship to get across; / I paid ten shillings for a blind white horse.  
I upped on his back and was off in a crack, / Sally tell my mother I shall never come back.  
(Raymond Briggs, *The Mother Goose Treasury* (Tokyo: Yohan Publications, 1980), p. 159.)  
斜線は改行を示す。

さらには、アニー以外にもジプシーを好意的にとらえている家族がこの作品に登場する<sup>18</sup>。この場面からは、ジプシーに夢中になっている少女や、我が子の将来を心配し、ジプシー占いで、ばら色の予言を受けることで心底喜ぶ母親の姿がうかがえる。普通に暮らしているイギリス人家庭の中にも、その能力に頼ったり、アドバイスを受けて参考にしたたりする人たちが存在したということが看取される。

ここから、ジプシーは排他的で、社会にとっては、単に悪事を働くだけの厄介者という否定的な面だけではなく、肯定的な面も持ち合わせているということがわかる。

## 第2節 作中でのジプシーの役割

ミードが、ジプシーの持つイメージの、否定的な側面と肯定的な側面をこの小説の中で巧みに利用していることについて既に述べたが、本節では、否定的な側面に焦点を当てて、考察してみたい。

この小説の中で描かれているジプシーの集団は、根無し草のような存在で、必要に迫られれば、瞬時に移動できる統率のとれた集団である。結束が固く、集団の利益のためならば、悪事を行うことも厭わない。また、彼らの肌の色の濃さは階級差と結びついていて、イングランドの最下層よりさらに低い身分である。イギリス国内にあって、ジプシーは、人種的他者である。このジプシー、つまり anti - Englishness を描くことによって、イギリス人らしさとかイギリスらしさ、Englishness の良さが浮かび上がってくる。言い換えれば、ジプシーは、中心的な人物が立ち上がってくるための悪役としての役割を担っているということができる。

当時のイギリスは「断固とした帝国主義の結果の植民地拡大により、イギリスは世界のリーダー的存在」<sup>19</sup>であった歴史的状況からうかがえるとおり、植民地が文化的に劣等であることが、帝国主義下におけるイギリスの対外進出の根拠とされた。これと同様に、人種的他者であるジプシーは、主人公の勇気ある行動や慈愛、自己犠牲などの美德を引き立てる役割を請け負っている。anti - Englishness としての、ジプシーのモラルに欠ける行動やみずぼらしさ、あるいは、教育を受けることのない汚い子供たちを描くことによって、それと対置される Englishness の勇気、慈愛などの美德、ひいてはイギリスの国や社会の優れた面が人々の目を引くようになる。

主人公たちの住む環境に目を向けてみると、そこはジプシー社会とは対照的な光景である。裕福な家庭の少女たちが、きちんとした生活態度で、洗練された教育を施されている。このラベンダー・ハウスが象徴するのは、強力な国家を背景に持ち、確かな地位を築いた人々の姿である。

当時のイギリスは、封建制度に基盤を置く家父長制度が厳格に存在していた。一家の長として男性が君臨し、女性や子供たちはその命に従う必要があった。このことは、レイチェルと名乗る女性が物事の主導権を握るジプシーの社会とは明らかに異なっている。この邪悪な老婆は、アニーに恨みを抱き、その復讐のための機会をうかがっていた。レイチェルの支配力がこのジ

18 Ch. 41, p. 282-84.

19 Akiko Higuchi, *The Discrepancy Between Spoken Language and Written Language: "Bessie's Song" in Jane Eyre*, (英文) 『学習院大学言語共同研究所紀要 第22号』学習院大学 言語共同研究所, 1998年, 86ページ参照。



ブシー集団全体に及んでいたことが、次の場面からうかがえる。それは、ほとんどのテントが次のキャンプ地へと移動した後、出発が遅れて1つだけ残ったテントで、父親の出発準備の手伝いをしていたジブシーの少女が、アニーと話をしている場面である。

The girl told Annie that she was very glad they were going from here; that this was a very dull place, and that they would not have stayed so long but for Mother Rachel, who, for some reasons of her own, had refused to stir. (Ch. 41, p. 278)

例年ならば、もうすでに次の居留地に移動していてもいい時期であるのに、レイチェルの判断で、すべてのテントの移動が引き伸ばされている。ここからは、集団の最上位に君臨するレイチェルの姿が見て取れる。この集団のメンバーは、彼女の意向に従う以外にない。男性たちは、この邪悪な老婆の陰に完全に隠れてしまっている。

ミードは、このような anti-Englishness としてのジブシー社会を提示することによって、イギリスの良家の教育やマナーを優位なものとして位置づけようとしたのではないだろうか。ジブシーのイメージの持つ否定的な側面を巧みに用い、それらをオブジェクトとして提示することによって、イギリスの社会や家庭を、ジブシーの社会や家庭よりも上位に置くという、イデオロギー操作がなされていると考えられるのである。

### 第3節 ミードが理想とした若い女性像

ミードが理想とする女性像を考えるために、まず『少女たちの世界』の主人公アニー・フォレストのキャラクターに注目したい。彼女は、“a bright, gypsy-looking girl” (Ch. 3, p. 15) と表現されているように、ジブシーに似た容貌をしている。ここには、ジブシーの持つイメージの肯定的な側面が利用されている。つまり、既成の概念にとらわれないとか、自由であるとか、未知の能力を秘めている、または、人を引き付ける不思議な魅力があるなどのイメージである。また、“wild, naughty, impulsive” (Ch. 10, p. 62) という描写からはアニーが、一般的に考える少女の性格とは、かなり異なっていることが見て取れる。読者は、彼女の周りでは様々な騒動が巻き起こされることを予感する。そして実際予想された通り、様々な出来事が原動力となってストーリーが展開していく。

この小説の中には、アニーとはすべてが正反対の少女ドーラが登場する。『ジェイン・エア』を隠し持っていたのが、このドーラである。彼女は、プライドの高い10代後半の少女で、多くの女生徒たちの憧れであると同時に、多くの反感もかっていた。彼女が作中でどのように表現されているかを見てみよう。彼女の “Hers were the whitest hands in the school, and hers the most perfectly kept and glossy hair.” (Ch. 10, p. 71) という外見からしてこの少女は、若いイギリス女性の理想像であるとみなすことができる。ミードは、本文中で彼女について次のように述べ、最上級の賛辞を送っている。

She was a thoroughly accomplished girl, graceful in her appearance and manner; in short, just the sort of girl who would be supposed to do credit to a school. (Ch. 29, pp. 206-07)

しかし、この作品の中で彼女は、弱者に対する思いやりを持つことはなく、情が薄く、常に自分本位の行動をする。また、自分の頭で考え行動する独創的な面は何一つ持たない“a copyist” (Ch. 29, p. 207) と、本文中に表現されている。ミードは、旧来の女性の理想像のようなドーラを主人公とせず、ジブシーに似た外見を持ち、女らしいとはいええない性格を持つアニーを主人公に設定している。それは、作者の考える若い女性の理想像が、ドーラのような洗練された美しさを備えた女性とは異なっていることを物語っている。

ミードは、1895年に雑誌「ストランド」に女子教育に関する自分の意見を寄稿した。その中で彼女は、“girls, so trained, must surely be the New Women for whom we long.”<sup>20</sup> と断言し、教育の重要性を強調した。ミードが望む、学問により教養を高め、自分で判断し行動する女性は、このラベンダー・ハウスの教育の理想とするところでもある。アニーの独創性は、誰にも負けない勇気や、人々に対する深い愛情、聡明さなどの美德と相まって複雑な色を作り出している。そして、川端氏が指摘したとおり、「優れた知性と伝統的な女性的な資質が、難なく両立する」<sup>21</sup> 主人公として、この『少女たちの世界』に登場したのである。

アニーは、“She’s the most amusing and good-natured dear pet in Christendom.” (Ch. 4, p. 24) と表現されているように、学園の中では人気者である。1887年10月号のアタランタ・スカラシップ・リーディング・ユニオンで、ウォルター・スコットの執筆担当となった童話作家のアンドリュー・ラングは、スコットがいかに関心から愛されていたかを、次のような表現で伝えている。

In his own time he was not only dear to every man and woman who knew him, but even animals who do not usually make friends, even hens and pigs could hardly be prevented from following him like dogs. (*Atalanta*, October, 1887, p. 51)

ここから見て取れるように、人間だけでなく、物言わぬ動物にも好かれるということは、その人が愛情あふれる魅力を持っているということを十分に示唆する表現であると言えよう。実際これと同じような表現で、ミードはアニーの魅力を描き出している。

As a little child going to visit with her mother at strange houses, the watch-dogs never barked at her; on the contrary, they yielded to the charm which seemed to come from her little fingers as she patted their great heads. Slowly their tails would move backward and forward as she patted them, and even the most ferocious would look at her with affection. (Ch. 45, pp. 297-98)

どのような犬でさえ手なずけてしまう魅力のおかげでアニーは、タイガーという名の獰猛なジブシーの番犬を味方にするのができ、幼女の救出に成功する。しかし、最初に恐ろしいジブシーの番犬に近づいていくには、かなりの勇気が必要である。そこからは、アニーの幼女を助けたいという気持ちの中に、多くの自己犠牲の精神が含まれていることが読み取れる。この

20 Mitchell, p. 22.

21 川端有子「アタランタ 別冊解説」, アティーナ・プレス, 2009年, 3ページ。

アニーの性格を、ミードは別のページで次のように表現している。

...she thought well of all her school fellows - and on occasions she could be self-sacrificing and good-natured to a remarkable extent. (Ch. 11, p. 77)

この内容は、ミードと共に雑誌「アタランタ」編集者の1人であったアリシア・リースが、読者の進むべき道を示した次の文章と軌を一にしている、この時代に女性が備えるべき美德の一つとして「自己犠牲」があげられていたことが看取される。

Strive your utmost by self-denial and energy to complete the work begun. (*Atalanta*, Sep., 1888, p. 717)

この“self-sacrificing”も“self-denials”も、キリスト教を基盤とする、当時の人々が理想とした美德の1つの形である。アニーの、さまざまな困難に直面しても、屈服しない強い精神力や、真の優しさと勇気、そして神の心と自分の信念に従って行動する姿は、これから世の中へ出ていく若い少女たちのあるべき姿として、この小説の中に提示されているのである。

『少女たちの世界』は、ジプシーに似た少女が主人公である。このことは、外見はそれまでのイギリス女性の美人の規格からは外れているが、新しい女性、外見より内面の美しさを備えた女性の魅力を生き生きと描き出そうとするミードの創作方針を示すものではないだろうか。ドーラの言動と対比されることで、アニーの持つ内面の美しさが現れてくる。これは、『ジェイン・エア』の作者が描こうとした理想の女性にも共通する。作者のシャーロット・ブロンテは、妹達に「私と同じように不器量で小柄な女主人公が、あなたたちの美しい女主人公と同じように興味深い人物になることを見せてあげます」<sup>22</sup>と云い、容姿の美や財産という外面的なメリットは一切持たず、ただ内面の美しさだけが優れている主人公ジェイン・エアを作り出した。

ミードは、作家として、また編集者として、これからの新しい時代を生きていく若い女性の理想像を、ドーラに代表されるような古いタイプではなく、内面の美しさと勇気で将来を切り開いていく新しいタイプの中に見出している。これは、変化しつつある社会状況をたくましく勇敢に乗り切っていく「ジェイン・エアの娘たち」ともいうべき、この時代の女性達のあらまほしき姿であろう。

#### 参考文献

*Atalanta*. vols, 1-1, 1-2, 2-1, 2-2 (Oct. 1887-Sep. 1889) Tokyo: Athena Press, 2008.

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Edited by Margaret Smith, with an Introduction and revised Notes by Sally Shuttleworth. New York: Oxford University Press, 2000.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. London: Penguin Books, 1997.

Meade, Elizabeth Thomasina. *A World of Girls: The Project Gutenberg EBook* www.gutenberg.org

20 Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, (London : Penguin Books, 1997) p. 235.

Release Date: June 22, 2008 [EBook #25870].

Mitchell, Sally. *The New Girl; Girl's Culture in England, 1880-1915*. New York: Columbia University Press, 1995.

Hawthorn, Jeremy (ed.). *The Nineteenth-Century British Novel* (Stratford-upon-Avon Studies, second series) London: Edward Arnold, 1986.

Higuchi, Akiko. *The Discrepancy Between Spoken Language and Written Language: "Bessie's Song" in Jane Eyre* (英文) 『学習院大学言語共同研究所紀要 第22号』 学習院大学言語共同研究所, 1998年。

McCord, Norman. *British History 1815-1906* Oxford: Oxford University Press, 1991.

青山誠子 『ブロンテ姉妹 人と思想 128』 清水書院, 1994年。

エリザベス・ギヤスケル 山脇百合子(訳) 『シャーロット・ブロンテの生涯』 (ギヤスケル全集 7), 大阪教育図書, 2005年。

川端有子 「アタランタ 別冊解説」, アティーナ・プレス, 2009年。

『パウロの名による書簡 共同書簡 ヨハネの黙示録』 (新約聖書 ), 保坂高殿・小林稔・小河陽(訳), 岩波書店, 1997年。